佐賀県5大学共同開講

「子どもの支援 I (基礎・実習)」の前半基礎ユニット報告

〇本年度(平成26年度)、「子ども発達支援士養成プログラム」に受講登録した佐賀県5大学の学生は、表1のように150名であった。

〇このプログラムに登録した学生は、所定の実習と科目を履修することにより、「子ども発達支援士(基礎)」(主に短大生)か「子ども発達支援士」(四年制大学学生と卒後プログラムを受けた短大卒業生)の資格が大学コンソーシアム佐賀より認定される。(それぞれの資格の説明は関係ページを参照のこと)

〇このプログラムの中で、5大学が共同開講する科目が「子どもの支援 I (基礎・実習)」である。この科目は前・後学期、各1日の集中講義と30時間の支援実習 I によって構成されている。集中講義を、前半基礎ユニット(講義・グループワーク)、後半基礎ユニット(講義・グループワーク)と呼んでいる。

〇支援実習 I の事前指導として,前半基礎ユニットを5月18日(日)の午前と午後,佐賀大学で開講した。他の必修の実習と重なった学生を除く,全員の学生が受講した。

〇午前の部は、講義を行った。昨年度と同様、受講した学生が新入生中心であったので、九州龍谷短期大学の鬼塚准教授が、「発達障害の基礎知識」のテーマのもと、発達障害のある幼児・児童が見せる行動とその背景、そして支援の基本について説明した。

続いて、佐賀女子短期大学の泉支援コーディネーターが保育所勤務の経験などを踏まえながら、「保育所の現状」をテーマに、幼児保育・教育の現状と課題、そして、望ましい保育者・幼稚園教諭とは何かについて説明した。

大学名	受講登録者
佐賀大学	18名
西九州大学	42名
九州龍谷短期大学	30名
佐賀女子短期大学	46名
西九州大学短期大学部	14名
合計	150名

(表1 平成26年度受講登録者)



鬼塚 良太郎 准教授 (九州龍谷短期大学)



泉 万里江 支援コーディネーター (佐賀女子短期大学)



(午前中の講義の様子)

〇午後の部は、5大学の学生が大学の壁を越えて、5~6名程度でグループをつくり、午前中の講義も踏まえながら、「子どもとかかわる上で大切なこと」をテーマに、KJ 法を使って、グループワークを行った。グループごとに大学教員が指導・助言者としてついた。





(グループワークの様子)

(グループワークのまとめの発表)

〇下は、グループワークのまとめの一例である。

これから支援実習1に臨むにあたって、「子どもとかかわる上で大切なこと」として、このグループは5つの点にまとめている。

(グループワークの一例)

子どもとかかわる上で、大切なこと

「一人の人間として見る
すべての多とも違い受情。自尊心を持った同じ人だから障べいの有寒は関係ない

②子どもの立ち場に立つ
子どもの行動には必ず意味があるので、はぜその多がそうするのかかからうとし、子どもの 気持ちを代弁することが大切 乳 却 児 期 の 基礎 が 大 事 だから、知識を身につけることでできる バストな環境をつくることができる 経験を通して今までと違った視点から学ぶことができる

⑤ いろんな人の 言もと聞く
保護者や保育者と「他 みを共有し、子どもへの対応に生かす為

O下は、ある学生のワークシートの抜粋である。

佐賀県5大学の学生が一同に集まって受講し、グループワークを行ったことに新鮮さを感じ、意欲をもって支援実習 I に臨みたい、と感想を述べている。

4. グループで話し合って、あなたが考えたこと

(ワークシートへの記述例)

今回、3ともについて学ですいと意志を同じておる人にちゃりいつでを作って話しるい、さらにそれは大学を超えた仲間であったという機会が得られたことはとこし新鮮でした。
みんなれた同じょうに教めての試みで不安やじ配も少しはあるということが厳いられたし、みんな特殊は3ともに関わりのある仕事かですいということだった。カで、共に政長にていまたいと改めて漁べ思いましたの将来3ともと関わるり繋にいどらいころうとしかで申じて、学れる環境を撃えてあげられるかと、学はとして、主場といる。教師の立場をして考えることが自然にできるようになれるよかと、学はとして、主場といる見いまる。

〇学生たちは、支援実習 I 終了後の11月か12月、再度全員が集合し、後半基礎ユニットを受講する。その時のグループワークでは、同じメンバーが集まり、5月段階で大切と思っていたことを、実習を踏まえて、さらに深めた議論をさせたい。